

# 日英語の新聞社説における疑問表現の諸相

## —「段」の統括機能に注目して—

桶 谷 潤

### 1. 研究目的と課題

疑問文は、一般に「その命題に対して話し手の判断が成り立たないことを前提として、聞き手に問いかけて解答を引き出そうとする機能をもつ文」(日本語教育学会(編)2005:135〔安達太郎氏執筆〕)ではあるが、文章においては、文章全体の主題や書き手の主張を表すことがある。永野(1986:270)は、「論説・説明文は、何事かについて論述し、説明するものであるから、当然“課題”がある」とし、「～(の)は、なぜだろう」のような課題が明示される文章構造を「課題解答方式」とした。このように、文章における疑問表現には、文章全体の課題を提示し、その課題に沿って文脈が形成されるような文章全体を「統括<sup>(1)</sup>」する機能がある。ただし、疑問文は文章全体のみならず、文章を構成する「文段<sup>(2)</sup>」を「統括」し、部分的に話題をまとめる機能も有していると考えられる。また、高崎(1989)は、冒頭に用いられる疑問文は「何について書き手の見解が述べられてゆくのかをあらかじめ掲げるときによく用いられる形式」とし、課題を提示するものと捉えているが、課題提示に留まるものではないと考える。

本稿は、日英語の対照文章論の立場から論説文である新聞社説に焦点を当て、①「疑問表現<sup>(3)</sup>」の使用数、使用種類、使用位置の傾向はどのようなものか、②使用位置による「統括機能」の違いが認められるのか、③文章全体を通じた疑問表現の使用傾向にどのような違いがあるのか、という3点の課題について分析し、両語の新聞社説における疑問表現の「統括機能」の異同を解明する。なお、本稿における「統括機能」は、佐久間(2003:95)に従って、「複数の文の集合体が大小の話題のまとまりを作り上げる働き」とする。

### 2. 分析方法

#### 2.1 分析資料

分析資料として用いたのは、日本語は、『朝日新聞』(以下、『朝日』と称する。)の2017年3月1日から31日に掲載された社説全59文章(全1,524文)、英語は、“The New York Times”(以下、“NYT”と称する。)の同じ期間の社説(Editorials)全86文章(全1,963文)である。

## 2.2 分析方法

### 2.2.1 疑問表現の分類

疑問表現を、日本語は『新版日本語教育事典』、英語は『現代英文法辞典』を参考に、(1)「真偽疑問文<sup>(4)</sup>」(yes-no question)、(2)「補充疑問文」(Wh-question)、(3)「選択疑問文」(alternative question)、の基本的な3分類に分けたうえで、本稿では、(4)「その他」を加えて全4種に分類する。(4)「その他」は、(1)～(3)の疑問文とは異なり、文の形式は疑問文であるが、相手に問いかけて返答を求める機能を持たないものである。日本語には、本来否定疑問文であった「のではないか<sup>(5)</sup>」、疑いを表わす「だろうか」、提案を表す「どうか」が含まれる。英語には、反語的な修辭疑問(Rhetorical Question)が含まれる。

「その他」を分析対象としたのは、論説文においては疑問表現を用いて書き手の意見を述べることが考えられ、「その他」を設定することで読み手に対する問いかけの有無など疑問表現をより包括的に分析し、疑問表現の社説における統括機能を明らかにできると考えたためである。

### 2.2.2 文章の区分

疑問表現が文章全体のどの位置で用いられ、それが文章全体の文脈にどのような影響を与えるのかを明らかにするために、文章全体を3種の大文段(「Ⅰ. 開始部」, 「Ⅱ. 展開部」, 「Ⅲ. 終了部」)に区分する。「Ⅰ. 開始部」と「Ⅲ. 終了部」は各1文段で、「Ⅱ. 展開部」は複数の文段で構成される。新聞社説における各大文段の内容は、次の通りである。

「Ⅰ. 開始部」: ある話題に対する書き手の見解や、話題の大まかな内容。書き出し文のみの場合もあれば、それに複数の文を加える場合もある。

「Ⅱ. 展開部」: その話題の具体的な事実。複数の文段で構成され、話題の具体的な事柄やそれに対する書き手の見解などで構成される。

「Ⅲ. 終了部」: 話題に対する書き手の意見や要望などの見解。文章全体のまとめの役割を果たす。形態指標として「接続表現」, 「反復表現」, 「提題・叙述表現」, 「指示表現」を手がかりに筆者が文章を3種の大文段に区分した。

文段には「中心文」があるが、「中心文」について佐久間(2003:101)では、「一つ的话题を表す複数の文集合をまとめ、一つの段を成立させる働きを持つ文のことである。」と定義する。中心文を認定する際には、文末叙述表現と中心文の統括機能による種類を指標とする。文末叙述表現の形態的特徴は、河内・佐久間(2010:79)による〈A. 事実描叙〉〈B. 見解判断〉〈C. 感情表出〉〈D. 情報伝達〉〈E. 行為伝達〉の5種とし、中心文の種類は、佐久間(1995)で提示された4類17種<sup>(6)</sup>に従う。

疑問表現が中心文となる場合には、17種中の〈課題導入〉, 〈問題提起〉が主な機能になることが考えられるが、本稿では疑問表現のすべてに、中心文であるなしにかかわらず、文章中での機能として考えられる〈課題導入〉〈問題提起〉〈意見主張〉〈評価批評〉を認定した。なお、本稿における〈課題導入〉と〈問題提起〉の区別は、〈課題導入〉は課題を提示した後でそれについての詳しい説明や解決方法などが提示される場合で、〈問題提起〉は課題を提示するのみで解決策などは示さず、問題

の存在のみを示す場合とする。

### 3. 分析結果

#### 3.1 疑問表現の大文段別及び種類別の使用数の傾向

本節では、課題①である疑問表現の数、種類、位置の傾向について述べる。

『朝日』の社説全 59 文章中に、疑問表現の用いられた文章は 47 例 (79.7%) ある。疑問表現は、全 108 例 (うち間接疑問文 22 例) あり (1 文章につき平均 1.8 例)、総文数 1,524 文の 7.1% である。また、“NYT”の社説全 86 文章中には、疑問表現の用いられた文章は 23 例 (26.7%) ある。疑問表現は、全 39 例 (うち間接疑問文 9 例) あり (1 文章につき平均 0.5 例)、総文数 1,963 文の 2.0% である。『朝日』が全文章の約 8 割に疑問表現が用いられているのに対し、“NYT”では 3 割弱である。疑問表現の使用文数も、“NYT”の総文数が『朝日』より 439 文多いのに、『朝日』の 4 割以下である。明らかに、『朝日』では“NYT”より疑問表現が多用される。これは、『朝日』では話題 (課題) を提示したり、書き手の主張を述べたりするのに疑問表現がより多く使用されることを示している。

日英語の新聞社説における大文段別の疑問表現の使用数の調査結果を【表 1】に示す。

大文段別の使用傾向を見ると、多くの文数を抱える「Ⅱ. 展開部」での出現が一番多いのは当然として、日本語では「Ⅰ. 開始部」、「Ⅲ. 終了部」でも疑問表現が活用されていることがわかる。一方、英語では「Ⅰ. 開始部」と「Ⅱ. 展開部」での使用に集中している。同じ大文段で用いられる疑問表現もその機能が同じとは限らない。各大文段別に疑問表現の文章中での機能を検討するが、本稿では紙幅の関係から「Ⅰ. 開始部」と「Ⅲ. 終了部」で用いられる疑問表現に絞って検討する。

疑問表現の種類別の使用数を【表 2】に示す。

『朝日』では、補充疑問文で用いられる疑問詞<sup>(7)</sup>は、「どう」を伴う疑問詞が全 39 例 (全疑問詞 68 例に対し 57.4%) と一番多く、次に多いのが「何」の 10 例 (同 14.7%) である。日本語の社説では

【表 1】 疑問表現の大文段別使用傾向

新聞名 \ 大文段	I. 開始部	Ⅱ. 展開部	Ⅲ. 終了部	合計
『朝日新聞』	18 (16.7%)	66 (61.1%)	24 (22.2%)	108 (100.0%)
“The New York Times”	13 (33.3%)	20 (51.3%)	6 (15.4%)	39 (100.0%)

【表 2】 疑問表現の種類別使用傾向

新聞名 \ 種類	補充疑問文	真偽疑問文	選択疑問文	その他	合計
『朝日新聞』	58 (53.7%)	23 (21.3%)	4 (3.7%)	23 (21.3%)	108 (100.0%)
“The New York Times”	23 (59.0%)	7 (17.9%)	5 (12.8%)	4 (10.3%)	39 (100.0%)

ある事態に対して「どのようなものか」、「どのように対処するか」といったことが関心事として捉えられる傾向があるようだ。「その他」では、「(の)ではないか」10例、「だろうか」が9例ある。「その他」の中の「(の)ではないか」、「だろうか」の使用が『朝日』の社説における疑問表現使用の一つの特徴であると考えられる。

“NYT”では、補充疑問文の多用が目立つ。疑問詞別では、“what”が11例（全疑問詞31例に対し35.5%）と最も多く、次が“why”の10例（同32.3%），“how”の7例（同22.6%）である。日本語と異なり、英語では「何をしたのか」、「なぜしたのか」に関心が向けられることを示している。また、“NYT”では、疑問表現を用いて書き手の見解を述べることはほとんどなく、補充疑問文を用いて欠けた情報を補う傾向が強いことを示している。

### 3.2 日本語の社説における疑問表現の大文段別の統括機能

本節では、課題②である使用位置による統括機能について述べる。まず、3.2で『朝日』、3.3で“NYT”の社説に用いられた疑問表現を2つの大文段ごとにその統括機能を概括する。統括機能を明らかにするために、疑問表現の種類、疑問表現とそれに対応する応答表現の出現箇所なども含めて分析する。応答関係については、表現上対応していたり、内容的に応答すると考えられるもののみ取り上げる。

#### 3.2.1 「I. 開始部」における疑問表現

「I. 開始部」には59文章中16文章（27.1%）に疑問表現が用いられ、疑問表現の文数は18文ある。内訳は、「補充疑問文」が6例（18文に対し33.3%）、「真偽疑問文」と「その他」が各5例（同27.8%）、「選択疑問文」が2例（同11.1%）と、疑問表現の種類に大きな差は見られない。選択疑問文も、全4例中2例が「I. 開始部」に用いられている。「その他」の中では「だろうか」が4例、「ではないか」が1例である。

「I. 開始部」に用いられる疑問表現の主たる機能は、文章の冒頭で文章全体の主題—ある事柄にどのような課題があるか—を提示することである。ただ提示するだけでなく、書き手の意見が含まれることもあるので、疑問表現自体が「I. 開始部」の中心文となる傾向があり、16文章中11文章で、疑問表現が中心文となっている。

次の文章例（1）は、(4)「その他」の疑問表現が文章の書き出し文に用いられた例である。

なお、以下の文章例中の記号は筆者が付したもので、ローマ数字は大文段を示し、「I」は「開始部」、「II」は「展開部」、「III」は「終了部」である。算用数字は段落（英語はパラグラフであるが、本稿では便宜上段落で統一する）、丸数字は文番号である。太字ゴシック体は疑問表現、二重下線は中心文を表す。

文章例 (1) 「**稲田防衛相** こんな釈明は通らない」

I 1 ① 国会答弁の重みを、**稲田防衛相**は理解していないのではないかと。② 閣僚としての責任

が厳しく問われる事態だ。

Ⅱ 2③ 国有地売却問題で揺れる「森友学園」の代理人弁護士を、稲田氏が務めたかどうか。

3④ 一昨日の参院予算委員会で、稲田氏は「裁判を行ったことはない」と言い切っていた

4⑤ ところが、学園が2004年に起こした民事訴訟で、稲田氏が原告側代理人弁護士として出廷したことを示す大阪地裁の記録が見つかったと報道された。

5⑥ すると稲田氏はきのう自らの出廷を認めたとうえで、答弁を訂正し、謝罪した。

6⑦ 森友学園の理事長を退任する意向を示した籠池(かごいけ)泰典氏が、稲田氏夫妻がかつて「私の顧問弁護士だった」と語ったことについても、きのうになって一転、「夫が顧問弁護士契約を結んでいた」と認めた。

7⑧ 基本的な事実関係について、事実に反する国会答弁を繰り返していたことになる。

(段落8文⑨～段落16文⑳省略)

(『朝日新聞』朝刊2017年3月15日)

文章例(1)の文①は、「I. 開始部」の冒頭で、「のではないか」を用いて、稲田氏の国会答弁に対する認識の甘さに関して書き手の疑問を読み手に投げかけている。「のではないか」の文は、「話し手が選択した可能性を提示して選択の妥当性を聞き手に問う」(宮崎2005:91)用法で、文①は、「国会答弁の重み」について、「稲田防衛相は理解していない」という書き手の見解を提示し、読み手にも同意を求める働きかけをしているものと考えられる。文①は〈課題導入〉と〈意見主張〉の複合的な機能を果たしていることになる。「II. 展開部」で、「理解していない」と判断できる具体的な事例が文⑥⑦に示され、文①の内容に沿って文脈が展開している。中心文は、書き手の意見が明瞭に述べられている文②である。

文章例(2)は、補充疑問文が用いられた例であり、その疑問表現が中心文となっている。

#### 文章例(2) 「中国全人代 安定の陰で進まぬ改革」

I 1① 中国の国会に当たる全国人民代表大会がきのう、北京で開幕した。

② 李克強(リーコーチアン)首相の政府活動報告からにじみ出たのは「安定」の重視である。

2③ 昨年来の欧米の動向、なかでも米トランプ政権の登場は、世界を不確実性で覆っている。

3④ 米国に次ぐ大国として、どう対応すべきか。⑤ 中国にとっても多難な年になりうるだけに、深刻な問いである。

(段落4文⑥～段落13文⑳省略)

Ⅲ 14⑳ 米国がどうあれ、世界で中国の重みは増す。㉑習主席も李首相も、多国間協力を支持し、貿易の保護主義への反対姿勢を明確にしているのは評価できる。

15㉒ だが、そうした原則を真剣に重んじるのならば、中国自身が政策決定の透明性を高め、経済の自由化を進め、公正な社会をつくる行動をみせるべきだ。

(『朝日新聞』朝刊2017年3月6日)

「I. 開始部」段落3文④の補充疑問文で、「中国はどう対応すべきか」の〈課題導入〉を行い、そ

れが中心文となる。「Ⅱ. 展開部」では「改革の精神が置き去りにされている」問題点を指摘し、その具体例が述べられ、「Ⅲ. 終了部」で、「Ⅱ. 展開部」の事実を踏まえた上で一定の評価を示しつつも、段落 15 文⑳で中国のすべきことを述べ、これが〈提案要望〉の中心文<sup>(8)</sup>となる。この文章例も文章例 (1) と同様に、「Ⅰ. 開始部」に示された疑問表現の内容に沿って、「Ⅱ. 展開部」以下が進められている。

ここで注目したいのが、文㉘が文④の疑問表現の応答表現になっていることである。「Ⅰ. 開始部」に提示された疑問に対して、「Ⅲ. 終了部」でその解答が提示されており、文㉘は〈解答説明〉の機能も果たしているが、疑問表現と応答表現が離れて存在している。上例のように「Ⅰ. 開始部」で提示された疑問に対して、「Ⅱ. 展開部」や「Ⅲ. 終了部」で解答が提示された例が全部で 4 例あった。これは『朝日』の社説の一つの特徴を示すものと言えよう。

「Ⅰ. 開始部」の疑問表現の機能をまとめると、〈課題導入〉として「Ⅰ. 開始部」の中心文になるだけでなく、文章全体の〈話題提示〉の機能も果たしている。また、「だろうか」や「ではないか」の疑問表現を用いて、読み手に書き手の〈意見主張〉を問いかける機能もあるなど、「Ⅰ. 開始部」の疑問表現は複合的な機能を兼ね備えている。

### 3.2.2 「Ⅲ. 終了部」における疑問表現

「Ⅲ. 終了部」には 59 文章中 17 文章 (28.8%) に疑問表現が用いられ、疑問表現の文数は 24 文ある。「Ⅰ. 開始部」での使用よりも 1 文章 6 文増えていることになる。内訳は、「補充疑問文」が 18 例 (24 文に対して 75.0%)、「真偽疑問文」が 4 例 (同 16.7%)、「その他」が 2 例 (同 8.3%)、で「選択疑問文」は用いられていない。補充疑問文の多用が目立つが、これは、最終的に「どうすべきか」「どう対処するのか」「なぜ~のか」等で今後に向けての問題点を明らかにするためだと考えられる。一例として文章例 (3) を示す。

#### 文章例 (3) 朴大統領罷免 国政の安定化が急務だ

Ⅰ 1 ① 大多数の国民から「ノー」をつきつけられた韓国の朴槿恵 (パククネ) 大統領が、その座を追われた。② 韓国の憲政史上初めて弾劾 (だんがい) が成立し、罷免 (ひめん) された。2 ③ この間、韓国政界は最高権力の長期間の空白という異常事態に陥った。④ 北朝鮮への対処など多くの懸案への対応が滞った。3 ⑤ 何より急ぐべきは国政の安定化である。⑥ 政府と与野党は大統領選挙のプロセスを遅滞なく進め、一日も早く統治機構を落ち着かせねばならない。

(文⑦から文㉘まで省略)

Ⅲ 13 ㉘ 次期大統領選では、一部権限の首相への分担も含めた改憲が争点になる可能性がある。14 ㉙ 同じ混乱を繰り返さないためにはどうすべきなのか。㉚ 権力のあり方を根本的に見つめ直す契機としてほしい。

(『朝日新聞』朝刊 2017 年 3 月 12 日)

文章例 (3) は、「Ⅰ. 開始部」で韓国の朴大統領が罷免された話題を取り上げ、「Ⅱ. 展開部」で

その原因や韓国社会の内情などが述べられている。その内容を受けて、「Ⅲ. 終了部」の文⑭で文章全体にわたる〈問題提起〉を、補充疑問文を用いて行い、文⑮で〈提案要望〉の形を取って終了している。

以上が、「Ⅲ. 終了部」における疑問表現の主たる機能である。全 24 例文中 18 例 (75.0%) が文章全体の〈問題提起〉となり、直後に〈意見主張〉や〈提案要望〉の中心文が置かれている。また、2 例が、疑問表現が中心文となって文章を締めているが、数は少ない。

文章全体の問題点を、「Ⅲ. 終了部」において疑問表現を用いて表していることは、読み手からすれば、具体的な問題点が最後に示されることで、何が問題なのか、何をどうすればいいのかが明瞭になるため、内容の把握にも効果的ではないかと考えられる。

### 3.3 英語の社説における疑問表現の大文段別の統括機能

本節では、“NYT”の社説に用いられた疑問表現を2つの大文段ごとにその統括機能を概括する。日本語と同様に、疑問表現の種類、疑問表現とそれに対応する応答表現の出現箇所なども含めて分析する。

#### 3.3.1 「Ⅰ. 開始部」における疑問表現

「Ⅰ. 開始部」には全 86 文章中 12 文章 (14.0%) に疑問表現が用いられ、疑問表現の文数は 13 文ある。内訳は、「補充疑問文」が 10 例 (13 文に対し 76.9%)、「真偽疑問文」が 2 例 (同 15.4%)、「選択疑問文」が 1 例 (同 7.7%) と、「Ⅰ. 開始部」では補充疑問文の使用が際立っている。

「Ⅰ. 開始部」に用いられる疑問表現の主たる機能は、「Ⅰ. 開始部」の文脈の中で疑問となる事柄を表すことであり、直後の文にその解答が示され、その文が中心文となる。つまり、中心文を導くための手段として疑問表現が用いられているのである。従って、疑問表現が「Ⅰ. 開始部」の中心文となることは少なく、12 文章中疑問表現が中心文と考えられるのは 2 例のみである。中心文を導く疑問表現の使用例を示す。

#### 文章例 (4) Neil Gorsuch Faces the Senate

Ⅰ 1 ① Here's a good question for Judge Neil Gorsuch, who sat before the Senate Judiciary Committee on Monday for the first day of his confirmation hearings to be a Supreme Court justice: Why are you here?

2 ② There's only one honest answer: "I shouldn't be."

3 ③ Under other circumstances Judge Gorsuch would be a legitimate nominee by a Republican president. ④ The problem is how he got to this point in the first place.

(以下省略)

(“The New York Times” MARCH 20, 2017)

段落 1 の文①に “Why are you here?” の補充疑問文が用いられているが、これは文②で “I shouldn't be.”、つまりゴースッチ氏が最高裁判事としてふさわしい人物ではないことを引き出すため

のもので、文章全体の話題や書き手の主張を表すものではない。文②が〈評価批評〉の中心文となり、段落3文④「問題はどのようにして彼がこの段階までたどり着いたのか」というこれまでの経緯を疑問視し、「Ⅱ. 展開部」にはその説明が続く。「Ⅲ. 終了部」には、彼の考え方の問題点を指摘し、「ゴースッチ氏が承認されれば、彼の見解は21世紀半ばまで判決に影響を与えることになる。」と結論付け、中心文②の根拠にもなっている。

日本語では、「Ⅰ. 開始部」に疑問表現で課題を提示し、「Ⅱ. 展開部」や「Ⅲ. 終了部」でその課題に対する解答や見解を示すこと、つまり、疑問表現とそれに対する応答表現が離れて存在することを指摘したが、英語にはそのような文脈展開はない。

「Ⅰ. 開始部」に用いられた疑問表現13文中、直後の文にその解答が提示された文が8例あることから、疑問表現が「Ⅰ. 開始部」の〈課題導入〉の役割と、中心文を導入する役割を担っていることがわかる。

### 3.3.2 「Ⅲ. 終了部」における疑問表現

「Ⅲ. 終了部」には全86文章中5文章(5.8%)に疑問表現が用いられ、疑問表現の文数は6文ある。内訳は、「真偽疑問文」が3例(6文に対し50.0%)、「補充疑問文」が2例(同33.3%)、「選択疑問文」が1例(同16.7%)である。

「Ⅲ. 終了部」に用いられる疑問表現の主たる機能は、文章全体の〈問題提起〉を行うことである。文章の最終文に疑問表現が置かれた例が2例あるので、その一つを次に示す。

#### 文章例 (5) Ignoring Diplomacy's Past and Its Future Promise

(文①から文②④まで省略)

Ⅲ 9 ②⑤ Fortunately, Congress, which holds the purse strings, is pushing back. ②⑥ Prominent among the critics is the Senate majority leader, Mitch McConnell, who said he did not view the State Department cuts as appropriate because “many times diplomacy is a lot more effective — and certainly cheaper — than military engagement.” ②⑦ Last month, more than 100 retired generals and admirals, in a letter to congressional leaders, argued that the State Department and the United States Agency for International Development are “critical to preventing conflict and reducing the need to put” American troops in harm’s way.

10 ②⑧ The question is whether Mr. Trump and Mr. Tillerson, businessmen unfamiliar with the ethos of public service, will listen to more experienced voices.

(“The New York Times” MARCH 29, 2017)

文章例(5)では、「Ⅰ. 開始部」で「トランプ大統領が国務省や海外援助プログラムの予算をカットし、国防費を増額しようとしている」という課題が提示され、そのような考え方が適当でないことが「Ⅱ. 展開部」で述べられている。「Ⅲ. 終了部」で、そのような動きに反する行動が紹介されているが、最終的な問題として文②⑧「トランプ氏やティラーソン氏が経験者の声に耳を貸すかどうか」



という問題点が提示され文章が終わっている。文⑳が「Ⅲ. 終了部」の内容をまとめる中心文である。文㉘は間接疑問文であり、もう一例も同じく間接疑問文であるが、中心文として「Ⅲ. 終了部」の内容をまとめている。

日本語の社説にも「Ⅲ. 終了部」に疑問表現が用いられた例が24例あったが、文章の最後に置かれた例はなく、その直後に意見や要望の文をつなげて終わるのが一般的な終わり方であった。英語では2例のみの最終文での疑問表現ではあったが、現状における問題点のみを指摘して文章を終わらせるのは、日本語の社説にはない特徴だと思われる。

### 3.4 日英語の疑問表現の使用傾向に関する考察

本節では、課題③である文章全体を通した疑問表現の使用傾向について考察する。

『朝日』の「Ⅰ. 開始部」における疑問表現の使用傾向に関して、疑問表現に対する応答表現（〈解答解説〉）が離れて存在しやすさを指摘した。形態上、内容上対応していると判断できるものに限って、両表現の間に何文あるか調べると、文章例(2)の場合が23文、他に文章例では示さなかった3例が9文、17文、24文（2文章分の長さの文章<sup>(9)</sup>）であった。ただし、「Ⅱ. 展開部」になると疑問表現の直後に応答表現が述べられることが多い。“NYT”では、疑問表現全39例中の18例（46.2%）、「Ⅰ. 開始部」は全13例中の8例（61.5%）が、疑問表現の直後に応答表現が示されている。日本語の場合は、疑問表現に対してその答えではなく、意見や要望を述べる場合も多いので、それも含めるとやはり疑問表現とそれに対応する表現との間には10数文の間隔があることになる。

その理由として考えられるのは、文章の初めの箇所で疑問表現を用いることで、読み手に対し疑問を投げかけ、その問題について読み手も巻き込んで論を進めていく姿勢が表れていることである。「Ⅰ. 開始部」では「だろうか」が4例用いられているが、「だろうか」について宮崎（2005：90）は、「話し手の〈疑い〉を聞き手に差し向けることによって、聞き手にもそれについて考えることを要求するという、間接的な〈問いかけ性〉が認められる」としている。高崎（1989）は、冒頭の疑問文について「別に読み手に対して問うているわけではない。」としているが、論説文においては、書き手の疑いの気持ちを表すことが、自分だけでなく読み手にも同じ疑いを持ってもらい、自分の考えに同調してもらおうという意図の表れであり、そこには一種の問いかけが存在していると考えられる。そこで、疑問表現の直後にその答えを示すのではなく、疑いの根拠となる事実を複数提示しながら読み手に納得してもらおうため、自ずと解答箇所が後半に示されることになるのである。書き手の主張を一方的に論じていくことを避けるために、疑問表現を各大文段で用いる傾向があるように思われる。

一方、英語の文章では、疑問表現はあくまでも重要な事実を導入するための手段であり、読み手に問いかけたり、考えさせたりする働きは見られない。文章全体の課題を、疑問表現を用いて書き出し文で示す例が2例確認できるが、直後の文に解答が示されるので、読み手に同調を求めたり考えさせたりする機能があるとは考えられない。あくまでも書き手の主張や重要な事実を提示することが最優先事項であり、それらを裏付けるような事実を複数提示しながら論を展開していくのが一般的な構成

である。

## 4. 結論と今後の課題

### 4.1 本研究の結論

本研究の課題①から③に対する結論は、以下の通りである。

**結論1** 『朝日新聞』の社説は、各大文段に疑問表現が用いられるが、“The New York Times”の社説は、疑問表現が少ない。疑問表現の種類別では、両社説とも補充疑問文が最も多いが、“NYT”での多用が目立つ。『朝日』は、否定疑問文や「ではないか」、「だろうか」を用いて書き手の意見を表すことがあるが、“NYT”では結論を表す場合は、常に平叙文を用いている。日本語の「(の)ではないか」のような固定した表現がないこともその要因と考えられる。

**結論2** 『朝日』では、「Ⅰ. 開始部」の疑問表現が〈課題導入〉や〈意見主張〉の中心文となるなど、文段の統括機能が認められるが、“NYT”には中心文となる疑問表現はない。「Ⅲ. 終了部」では、両社説とも〈問題提起〉の役割を果たすが、中心文となる例は少ない。“NYT”では、疑問表現が重要な事実を文章中に導入する手段として用いられることが多く、疑問表現の直後に応答表現が出現しやすいことから、中心文になりにくい傾向がある。

**結論3** 『朝日』には、平叙文で意見を述べる文も多く存在するが、書き手の主張を一方向的に展開するのではなく、疑問表現で読み手に問題となる課題や結論を問いかけ、ともに考え合いながら結論に導くという手法を取るのではないかと考えられる。

### 4.2 今後の課題

本稿では、2つの大文段ごとに出現する疑問表現を中心に考察したが、疑問表現と文章全体の文脈展開との関係を明らかにし、文章全体を統括する「主題文」となる可能性について検討する必要がある。本稿では紙幅の関係で分析を省いた「Ⅱ. 展開部」の疑問表現も、「Ⅰ. 開始部」「Ⅲ. 終了部」には見られない機能があるため、さらに分析を深め別の稿で明らかにしたい。また、新聞社説に限らず、他の論説文における疑問表現の統括機能についても調べ、日英語の文章における疑問表現の統括機能の異同を明らかにする必要があるが、今後の課題としたい。

注(1) 永野(1986:315)によると、「『統括』とは、文章を構成する文の連続において、一つの文が意味の上で文章全体を締めくくる役割を果たしている」としているが、部分的に統括されるものも含んでいることから、佐久間(2003:95)では、「統括の重層性」を「『相対的な統括機能』を有する段の重層構造に基づくもの」としている。

(2) 「文段」は「文章の内部の文集(もしくは一文)が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区分される部分」とされている。(市川1978:126)

(3) 疑問文のことであるが、平叙文の中に組み込まれた間接疑問文も分析対象にすることから、本稿では「疑問表現」という用語を用いる。

(4) 真偽疑問文には、「ないか」等で表される「否定疑問文」が含まれる。

- (5) 「のではないか」について日本語教育学会（編）（2005：136-137〔安達太郎氏執筆〕）では、「不確かな見込や記憶に基づいて話し手が何らかの判断の成立を予測して尋ねるのが基本的な用法」とあり、文章においては「主張をはっきり断定せずに表現する」と指摘する。
- (6) 4類17種とは、「①話題文」〈話題提示〉〈課題導入〉〈情報出典〉〈場面設定〉〈意図提示〉「②結論文」〈結論表明〉〈問題提起〉〈提案要望〉〈意見主張〉〈評価批評〉〈解答説明〉「③概要文」〈概略要約〉〈主題引用〉「④その他」〈前提設定〉〈補足追加〉〈承前起後〉〈展開予告〉である。
- (7) 1文中に複数の疑問詞が用いられる場合があるので、『朝日』の補充疑問文中の全疑問詞は68例、「NYT」は31例である。
- (8) これは〈意見主張〉の中心文とも取れるが、本稿では関係者や関係団体等に何らかの行動を要請するような文を〈提案要望〉として認定した。
- (8) 通常一日分の社説は2文章で構成されるが、時に1文章が2文章分の長さの場合がある。当該の文章は全文が48文である。

#### 参考文献

- 安達太郎（1999）『日本語研究叢書 11 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 荒木一雄・安井稔（編）（1992）『現代英文法辞典』三省堂
- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 河内彩香・佐久間まゆみ（2010）「第4章講義の談話の提題・叙述表現」佐久間まゆみ（編著）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版 pp. 74-103
- 佐久間まゆみ（1995）「中心文の『段』統括機能」『日本女子大学紀要 文学部』44 pp. 93-109
- 佐久間まゆみ（1999）「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要文学部』48 pp. 1-28
- 佐久間まゆみ（2002）「3 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店 pp. 119-189
- 佐久間まゆみ（2003）「第5章文章・談話における『段』の統括機能」北原保雄（監修）佐久間まゆみ（編著）『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店
- 佐久間まゆみ（編著）（2010）『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 高崎みどり（1989）「論説の文体」山口佳紀（編）『講座日本語と日本語教育 5 日本語の文法・文体（下）』明治書院 pp. 212-240
- 中村明他5名（編）（2011）『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店
- 永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店
- 日本語教育学会（編）（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- 南不二男（1985）「2. 質問文の構造」『朝倉日本語新講座 4 文法と意味Ⅱ』朝倉書店 pp. 39-74
- 宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』（ひつじ研究叢書（言語篇）【第36巻】）ひつじ書房